

<b>Title</b>	礫山の言葉“LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY.”の考察(中編)
<b>Author(s)</b>	喜田, 敬
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 7(2): 63-79
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=670">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=670</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 碌山の言葉 “LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY.” の考察 (中編)

喜 田 敬

Rokuzan's "Love is Art, Struggle is Beauty." (Part II)

Kei KIDA

The purpose of this thesis is to consider Rokuzan's real intention when he wrote "Love is Art, Struggle is Beauty." Part II seeks to get at the meaning of Rokuzan's struggle by focusing on his studies in the United States and in France.

本論は、近代日本彫刻の父碌山（荻原守衛）の言葉，“LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY.”の真意を考察するものである。本編では特に、碌山の米仏留学時代を中心に、碌山のSTRUGGLEの意味に対し考察を試みる。

## (前 編)

- 第1章 英語であること
- 第2章 井口喜源治との出会い
- 第3章 二つの学校
- 第4章 碌山の受洗
- 第5章 What is Art
- 第6章 肉の剣と霊の剣

(以上は聖学院大学論叢 第6巻, 1994年に掲載)

## (中 編)

- 第7章 碌山の革命観
- 第8章 留学生碌山
- 第9章 近代日本彫刻の父

---

**Key words;** Jesus of Nazareth, the Teacher-Pupil Relationship, People in their Environment, Self-Identity, Self-Reliance

## 第7章 碌山の革命観

1905年（明治38年）9月、ポーツマス講和条約は締結された。講和会議は、日本の期待に反し、ロシア優位に展開した観があった。条約締結後、日本の世論が日本外交の軟弱さを厳しく批判していたこの頃、碌山は、十重十に宛て書簡を送っている。ニューヨーク発、11月17日付の同書簡後半部には次のようである。「平和条件に就きましても色々内外の批判も聞きましたが、実の所はあれ位ならば結構と思ふです。只談判の懸引がまづかったと云ふ迄の事で、それにも小村男一人責任をかぶるのはひどいです。……政府は果して其宣言通りの主義を以て始めより戦ひしか否やと云ふ事です。彼等には世界人道の為めなどの考へは一つもなかったのでせう。只勢止むを得ずやったと云ふ迄でせう。だから其結果もそれ迄です。」<sup>(1)</sup>

碌山もまた、交渉においては、ロシア側が優位であった事を認めている。条約の内容についても、全く不満が無かったとは言えない。しかし彼は、「あれ位ならば結構と思ふ」と記すのであった。碌山は、ロシアの侵略主義には批判的であった。この戦も、日本がこのロシアの侵略行動に対し「只勢止むを得ず」始めた事と考へていた。しかし碌山は、日本が世界平和のために戦ったとも考へていない。日本「には世界人道の為めなどの考へは一つもなかった……。だから其結果もそれ迄」と言ったのである。そして、苦しい立場に立たされていた首席全権小村寿太郎に対し、深く同情するのであった。

この年、第一次ロシア革命は勃発した。同書簡には、「昨今の新聞では露国は大騒動の様です。世界人道の為め祝すべき事で、日露の戦は此の革命の寿命を一寸早めた事に依って甚だ功があると思ふです。日本自身の為にもさうでせう。政界に一進歩を見るでせう。」<sup>(2)</sup>とある。日露戦争後の碌山の関心は、戦時賠償よりも、東洋の永久平和<sup>(3)</sup>に、より強くあった。碌山にとっては、専制ロシアにおける人民蜂起は、ロシア人民のみならず、「世界人道の為め祝すべき事」と思えた。そして、この事件が、日本の民主化のためにも良い影響を与えることを期待するのであった。

しかし、殺戮を人類の愚行と信じる碌山は、つづけて「幾多猶太人は牛馬犬猫の如く大道の真中に斃され、食ふに物なき窮民は武器をとって貴族の骨を嚙まんとして騒擾しつゝあるなり。而してよし革命成らば如何。何又大した違ひもなきものなるべし。トルストイ伯曰く「吾人個々の心の中に平和なき限り世に平和あらん筈なし」と、至言なりと云ふべし。」<sup>(4)</sup>と記すのであった。ユダヤ人虐殺に憤り、圧政に苦しむロシア人にも同情的な碌山ではあったが、武力革命が、真に平和を作り出すとは考へなかつたのである。

今日、荻原守衛の号「碌山」が、夏目漱石の小説『二百十日』に登場する「碌さん」に由来することは、多くの人の知るところである。1936年（昭和11年）黒光は、著書『黙移』の中にも「碌山といふ名は漱石の『二百十日』を愛讀しその中の碌さんが面白いといつてゐたので、友人達が荻原

といはず碌さんと呼び、それが碌山となつたのです。』<sup>(5)</sup>と記している。碌山の、第二次フランス留学（1906年（明治39年）10月～1908年（明治41年）12月）中のエピソードである。黒光の言う「友人達」の一人、津田青楓は、当時を回想し、碌山は、「巴里で毎日おれとおなじアトリエに通つてゐた彫刻家だ。中々勉強家で面白い男だつた。夏目さんの小説がすきで、毎日仕事の休憩時間にそれをよんでゐた。彼の親友のS（註一齋藤與里）と、おれと三人が、飯時にレストランにおち合ふと、いつも、夏目さんの小説の話が出た。草枕だの二百十日だのを愛讀してゐた。二百十日の中の碌さんとか圭さんとか云ふ、青年の云つた言葉を一一覚えてゐて、それを問題にして批評を仕合つてよるこんで居つた。彼が號を碌山とつけたのも、全く二百十日の中の碌さんから來てゐるのだ。彼は碌さんの氣持が好きだつたのだ。』<sup>(6)</sup>と語つた。

パリの Academie Julian 彫刻部学生であつた碌山は、漱石を好んで読んでいた。しかし、『二百十日』を特に愛讀していたことは興味深い。漱石自身も気に入っていた同作品には、漱石の余裕ある社会批評が含まれている。作品中、漱石は圭さんに「なあに佛國の革命なんてえのも當然の現象さ。あんなに金持ちや貴族が亂暴をすりや、あゝなるのは自然の理窟だからね。ほら、あの轟々鳴つて吹き出すのと同じ事さ』<sup>(7)</sup>と言わせている。さらに、嵐の中を阿蘇登山する圭さんと碌さんの会話は、次のようにつづいている。「雄大だらう、君」と云つた。「全く雄大だ」と碌さんも眞面目で答へた。「恐ろしい位だ」暫らく時をきつて、碌さんが付け加へた言葉は是である。「僕の精神はあれだよ」と圭さんが云ふ。「革命か」「うん。文明の革命さ」「文明の革命とは」「血を流さないのさ」「刀を使はなければ、何を使ふのだい」圭さんは、何にも云はずに、平手で、自分の坊主頭をびしゃびしゃと二返叩いた。「頭か」「うん。相手も頭でくるから、こつちも頭で行くんだ」「相手は誰だい」「金力や威力で、たよりのない同胞を苦しめる奴等さ」「うん」「社會の惡徳を公然商買にして居る奴等さ」「うん」「商買なら、衣食の爲めと云ふ言ひ譯も立つ」「うん」「社會の惡徳を公然道樂にして居る奴等は、どうしても叩きつけなければならん」「うん」「君もやれ」「うん、やる』<sup>(8)</sup>。碌山は、この呑気で、どうしても構わない碌さんを面白がり、そして「碌さんの氣持が好きだつた」と言う。

『二百十日』は、1906年（明治39年）、『中央公論』に發表されたが、1907年（明治40年）4月13日には、徳富健次郎の『順礼紀行』に、碌山は以下の書き入れをしている。

「血の値は極めて高価也。然れ共之れを払はずして露國の革命や殆ど望み難かるべし。革命にも二様の意味在り、革命の革命あり、人類の革命あり。

前者は仏國に例を見るべく、後者は二千年前ナザレのイエス其範を示せり。兩者共に血の無量の高価を払へり。其の果は吾人の愚見を語るを不要。』<sup>(9)</sup>

2年前のロシア人民による武装蜂起は、この頃挫折していた。碌山は、「血の値……を払はずして露國の革命や殆ど望み難かるべし」と将来を觀た。消極的ではあるが、碌山のロシア革命の肯定ともとれる書き出しである。

漱石は『二百十日』の圭さんをして、「佛國の革命なんてえのも當然の現象さ。」と言わしめた。碌山も同様に考えたであろう。しかし、1907年現在のパリを知る碌山には、フランス革命が、革命の革命であったとしか思えなかった。圭さんも、フランス革命を當然の現象と言いながら、自分の意図する革命は、血を流さない頭の革命だと言う。そして、圭さんはこの「文明の革命」で、「華族や金持ちを豆腐屋にするんだ」<sup>00</sup>と言う。碌山は、この滑稽と結びつく漱石のユニークな作品を好んだ。だが、碌山言う革命は、無血革命ではない。「両者共に血の無量の高価を払へ」し革命である。

碌山は、人類の救済はキリストの十字架の尊き購いの血によると信じていた。そして、「人類の革命……は二千年前ナザレのイエス其範を示せり。」と書いた。碌山は、このイエスの犠牲の愛が、「人類の革命」だと考えた。そしてまた、人類もこのイエスの十字架を背負うべきだと、考えたようである。

「革命の革命」「人類の革命」。碌山は、「其の果は吾人の愚見を語るを不要。」と書き入れ文を結ぶのであった。

## 第8章 留学生碌山

碌山の留学は、1901年（明治34年）3月13日（出国地横浜）から1908年（明治41年）3月11日（帰国地神戸）の7年に及んだ。

この7年間に大別すると、以下4つの時代に区分出来る。

- 1) 第一次アメリカ留学：1901年（明治34年）3月（同年10月 Art Student's League of N. Y. 入学）から1903年（明治36年）10月まで。
- 2) 第一次フランス留学：1903年（明治36年）10月から1904年（明治37年）5月まで。
- 3) 第二次アメリカ留学：1904年（明治37年）5月から1906年（明治39年）9月まで。
- 4) 第二次フランス留学：1906年（明治39年）10月から1907年（明治40年）12月まで。（同年12月からイタリア、ギリシア、エジプトを旅行、1908年3月11日帰国）。

アメリカ留学時代の大半は、フェアチャイルド家の学僕として、蓄財と学業を両立させた時代であり、フランス留学時代は、この貯金によって、学業に専念した時代である。

碌山は、私費留学生であった。碌山の友人達には、国費留学生、社費留学生もいた。彼等が、国家、会社からそれなりの成果を期待されたのに対し、碌山は自由であったと考えられる。しかし、碌山はいつも留学費に窮していた。

1902年（明治35年）11月12日、碌山は家からの送金に対し、十重十に宛てた書簡の書き出しに「ア、申訳なし老母や父<sup>(マツ)</sup>母や汗をしばらくにし二百円、故国の血を吸う意気地なさ許し玉へかし。御恵の一百弗正に昨日落掌仕候。二百円の金難有からぬにはあらね共、其兄上の温かき同情と和氣

陽々たる家族の賜なるを思へば、只モ一難有きに涙禁じがたく候。』<sup>11)</sup>と記した。自立を目指し、アメリカへ渡った碌山である。自分の留学が、家族に犠牲を強いたと感じた時、ただただ心が痛んだ。しかし、この家族の愛が碌山を支え、そして、この家族への愛が碌山を支えていた。1903年（明治36年）10月、碌山は困窮を押して憧れのフランスへ渡った。

10月8日、パリに着いた碌山は、18日に十重十に宛て「今回渡仏の目的は第一、米国フ家の令息ブラヤ氏が何か小仕事位は骨折りくるゝとの事なれば、もし夫れさへ出来れば米国より仏国の方遙に優れりと存じ、金は極く僅かしか無之候へ共、夫れを見込みに渡仏致し候次第に候。』<sup>12)</sup>と書き送った。

フェアチャイルド家の三男ブレアは、この年結婚し、パリに渡って作曲活動を始めていた。碌山は、フランスで職を得ることが、いかに困難なことかは察していた。しかし、学業のためには、生活をアメリカからフランスへ移したかった。そこで、ブレアに望みを託したのである。結局望みは、かなえられなかった。碌山は、同書簡につづけて「兄上よ、度々に意気地なき奴との御叱、無謀の奴との御怒り、重々承知に候へ共、今回は必ず御返し申上べく候まゝ、是非共に御送金被下度、伏て願上奉候。……僕は只僅か百九十弗にて八ヶ月を学ばんとす。』<sup>13)</sup>と記した。

はじめ碌山は、仕事が見付からなければ、パリを見るだけでも勉強になると考えていたようである。しかし、パリに来た碌山は、仕事が無くとも学校へ通いたくなくなったのである。十重十は、この送金を断った。碌山は覚悟を決め、送金のないまま8ヶ月をパリで学業に励んだ。

翌1904年（明治37年）1月27日付十重十宛碌山書簡の内容は、その大半が詫びの言葉で埋められている。「兄上様よ、誠に申訳ありません。……全く僕の家にはソ一金のある訳けなし、又ソ一願へる訳はないです。……以後は決して金の無心はいたし申さずと、今更めて申す迄もなけれど、何卒今迄の処は御勘弁被下度、昔通りの赤ん坊と思召、可愛がって被下さい。僕から家庭の不和を買ふ事恐縮の至り、平に御海容被下度候。』<sup>14)</sup>碌山の第一次フランス留学は、彼の自立心をより強くした旅であったと云えよう。

1907年（明治40年）9月<sup>15)</sup>、19歳でパリへ留学した本多功は、日本人留学生の生活費について、「あの頃文部省の留學生が月に百五十圓の支給を受け……農商務省の方から来た人は補助金といふ譯で月六十圓を受け取ってゐて、……私は会社からの派遣留學できてゐたからその方から年二千圓きてゐた』<sup>16)</sup>と記している。第二次フランス留学時代、碌山は五来素川<sup>17)</sup>、斉藤与里<sup>18)</sup>、そしてこの本多と親交を深めた。

碌山と斉藤は、本多「の留守の時二人がきてはそこいら中引出しの中まで開けて菓子や何かがあるとみんな喰つちまつて、今度はもつとうまいものを置いとけなんて置き手紙などがしてあつた』<sup>19)</sup>と云う。また、本多は、「いま碌山館<sup>20)</sup>にある林檎を一つ描いた私の油繪なんかも、あれは始めいろいろ果物を置いて描きはじめる」と萩原がゐる端からみんな喰べちやつて林檎一つを残したんです。』<sup>21)</sup>とも記している。そして、「ジュリヤン近くの食堂へ皆でゆくと萩原は「本多、俺の前へ

来い、ポテトフライを取らう、一緒に食べやう、勘定はお前で食べるのは俺さ。俺は一食一フラン（四十銭）ときまつてゐるんだから」と云った具合で、私が葡萄酒をのんでも彼は水という風になる譯なのだが、さつさと私のをのんでゐました。それが妙にさうされた方が嬉しいやうに思へる。碌山はさういふ人間でした。」<sup>23</sup>と回想した。金のない碌山は、よく本多にたかったようである。しかし、本多は「それが妙にさうされた方が嬉しいやうに思へ」た。これは、碌山の性格からくる。光太郎は、碌山を「一見ひどくらくのやうに見えるが、實はなかなか細かに氣のつく人であり、内省的な性格が奥にあつた。」<sup>23</sup>と観た。犀水生も、碌山は「大ざつばな様に見えたが実は小心翼翼たる人で、非常に温厚篤実で、品行も方正で女色や金銭の慾も極めて淡泊」<sup>24</sup>と記した。そして、白瀧幾之助は、「彼は性恬淡豪放、一見豪傑型にも見えたが、クリスチャンで品行方正非常にやさしい人であつた。在留の本保義太郎君（註一金澤出身の木彫家）の肺結核で斃れし時なども傳染を怖れて何れもが近づく事を嫌忌するにも不拘、彼は親切に最後の始末迄よく世話して呉れた。」<sup>25</sup>と記した。

碌山は、その言動とは裏腹に、繊細な性格を持ち、品行方正にして情け深かったと云う。留学と云う緊張の連続する生活の中で、本多は碌山の悪意無き「悪戯」<sup>26</sup>を楽しんだのであろう。そして留学生たちは、肺結核で客死した本保に対する碌山の厚情を忘れなかった。

言うまでもなく、留学生の葛藤は、財的困窮にとどまらない。当時のパリ留学生の心の葛藤の一例として、1910年（明治43年）4月『趣味』、および7月『スバル』に光太郎が発表した散文二作に注目したい。

1908年（明治41年）6月、ロンドンからパリへ移り住んだ光太郎は、この国際都市の自由な雰囲気の中で、国籍すら忘れたかのようにくつろいでいた。しかし、『珈琲店より』の中には、以下の文章がある。パリのカフェで知り合った女性と一夜を共にした光太郎は、翌朝この女性の眼を見た。

「あをい眼！ その眼の窓から印度洋の紺青の空が見える。多島海の大石の映してゐるあの海の色が透いて見える。NOTRE DAMEの寺院の色硝子の断片。MONETの夏の林の陰の色。濃いSAPHIRの晶玉をMOSQUÉEの寶藏で見る神秘の色。……ふらふら立つて洗面器の前へ行つた。熱湯の蛇口をねぢる時、圖らず、さうだ、はからずだ。上を見ると見ると見慣れぬ黒い男が寝衣のままで立つてゐる。非常な不愉快と不安と驚愕とが一しよになつて僕を襲つた。尚ほよく見ると、鏡であつた。鏡の中に僕が居るのであつた。『ああ、僕はやつぱり日本人だ。JAPONAISだ。MONGOLだ。LE JAUNEだ。』と頭の中で弾機の外れた様な聲がした。」<sup>27</sup>

妻まじい民族的劣等感である。パリの生活に酔い痴れていた光太郎は、自分が異国人であることを自覚したとき、不安と自己嫌悪に陥るのであつた。

『出さずにしまつた手紙の一束』の一節には、「獨りだ。獨りだ。僕は何の爲めに巴里に居るのだらう。……僕の身の周囲には金網が張つてある。どんな談笑の中團樂の中へ行つても此の金網が邪魔をする。海の魚は河に入る可からず、河の魚は海に入る可からず。駄目だ。早く歸つて心と心と

をしやりしやりと擦り合せたい。寂しいよ。」<sup>28</sup>とある。光太郎は、日本人であることを意識すればするほど、パリでの生活が無意味に思えた。言葉が通じても、結局異民族間には、相容れない心のかべが存在すると感じて孤独であった。これは、単なる望郷病ではない。光太郎「は故郷へ歸りたいと共に又故郷へ歸つた時の寂しさをも窃に心配してゐる。あの脛の出る着を着て、黴の生えた畳に坐り、SPARTAの生活から藝術を引き抜いてしまつた様な乾燥無味な社會の中へ飛び込むのかと思ふと此も情なくなる。僕は天下の宿無しだね。しかし爲方がない。今、此處で費してゐる無意味の生活よりはもつと充実した一日が送れるだらう。」<sup>29</sup>と書いた。

光太郎が留学によって感じたことは、日本と欧米との生活、文化の違いより、日本と欧米との生活、文化の水準の違いにあった。欧米で藝術を学んだ光太郎には、「SPARTAの生活から藝術を引き抜いてしまつた様な乾燥無味な社會の中へ飛び込む」ことも、情けなく、そして寂しいことであつた。光太郎の心の中には、自国の社會にも適合出来ないかもしれないと云う不安があつた。

周知のとうり、光雲と光太郎とは特殊な父子關係にあつた。『出さずにしまつた手紙の一束』は、まずこの父と子の關係から話しが始まっている。「親と子は實際講和の出来ない戰鬪を續けなければならぬ。親が強ければ子を墮落させて所謂孝子に爲てしまふ。子が強ければ鈴蟲の様に親を喰ひ殺してしまふのだ。……今考へると、僕を外國に寄來したのは親爺の一生の誤りだつた。……僕は今に鈴蟲の様な事をやるにきまつてゐる」<sup>30</sup>。光太郎は、父との關係を壊したくはなかつた。しかし、留学によって眞の藝術に覺醒した光太郎は、父と自分の藝術觀の相違を意識しはじめた。光雲は、日本彫刻界の重鎮であつた。このことは、単に子が父を超えた、と云うことにとどまらない。父との対立、さらには、父が象徴する日本の彫刻界との対峙を意味する。光太郎は、そのことにも不安であつた。

そして「僕は今日不圖妙な事を考へた。『秘密の價値』といふ事だ。……考へてみると秘密の無いものに價値はない。又價値あるものに秘密の無いものはない。僕は自分で自分を秘密にするのだ。」<sup>31</sup>と心にきめた。光太郎は、パリでも孤独であつた。日本に歸つても孤独になることを予感した。そして、自分が價値ある者になるために、自分を秘密にすると云つた。孤高の藝術家の誕生である。

『珈琲店より』、『出さずにしまつた手紙の一束』は、光太郎のプライベートな書簡の形式をとっている。しかし、これらは本当に光太郎だけの問題であろうか。「自分を秘密にする」と言いながら、光太郎はこれらを雑誌に発表したことを忘れてはなるまい。

①民族的劣等感、②精神的鎖国性、③藝術觀の異なる祖国への帰国、④日本藝術界との対峙、⑤孤高の藝術家。

①と②は、かなりの日本人の意識の中に存在した問題である。③は、藝術留学生の多くが直面した問題であり、その中からは、日本の社會に、回帰する者、啓蒙を試みる者（④）、距離をおく者（⑤）などが現われた。



さて、碌山の中には、これらの問題は無かったのであろうか。

碌山のパリ留学の目的、パリ在住の必然性は、世界最高水準の芸術を学ぶことにあった。彼には、「日本では大家と言はるゝ人も、こちらでは小学校位なもの」<sup>62</sup>にしか思えなかった。では、碌山の芸術以外でのパリの印象は如何なるものであったか、井口宛の彼の書簡から、それらを追ってみよう。

1903年（明治36年）11月、「人には信仰の冷熱あり。時代には時代精神の高下あり。今の世は東西といはず、黒雲暗々たる時代にてあらざるか。過ぎし夜学友ミス、レキソーと語る。仏国基督教の腐敗より世界各国疑惑の雲井に迷ふ基督の再来を待ち、終りの日に迷ふ。基督去って二千年、彼の意□未解□はかなき哉。仏人は日本人に似たる所余程多き様に候。独立自由の意志少なくケチにして消極的に京都流に食物迄儉約するとの事に候。旧教を奉じて極めて保主的也（一般に）。」<sup>63</sup>。

同年同月31日、フランス人は「日本人に似て真勇なく浮華浅薄也。コーヒー店と女郎とは仏国政府が外国人を巴里に集むる手段の由。以て如何に巴里が奢侈、淫遊、墮愚の徒の多集せるかを知るべし。」<sup>64</sup>。

1906（明治39年）12月31日、「仏人の気質は軽薄で浮華でケチですから僕は嫌ひです。言語は流暢でキレーですが、……とにかく僕は仏人は厭です。……巴里の売色界などの事は申上げられん程ヒドイものです。……今此の地には六、七十人の邦人が居る様です。天長節や正月には大使館で夜会があって大抵は集るさうですが、僕は礼服を持ちませんから行きません。」<sup>65</sup>。

当時、アメリカのプロテスタント・キリスト教各派は、世界伝道に情熱をそそいでいた。多くのアメリカ人の生活も、教会を中心とするものであった。このアメリカからフランスへ渡った碌山は、フランスの教会の現状に敏感に反応するのであった。プロテスタント・キリスト者碌山は、1907年（明治40年）6月7日の十重十宛書簡には、「仏国は基督教も旧教にて、全く宗教などは無きも同じく候。」<sup>66</sup>とも記している。

パリ市についての印象は、まさに汚れた都と云うことになるが、碌山はこれをフランス政府の国際都市政策だと考えた。

そして碌山は、パリのフランス人を嫌っていた。但し、碌山がパリのフランス人を嫌いだと書くとき、「日本人に似て」と繰り返していることを忘れてはならない。碌山は、礼服を持っていないので、大使館の夜会には出席しなかったと記している。斎藤は、このことについて、「君は四角振つた処だの虚礼を振撒き合ふ集りなどには決して出られなかつた在巴里日本人學生間に出来て居るパンテオン會にも遂ぞ顔を見せた事はなかつた其の位だから大使館などの夜会には無論……私などが「君大使館にだけは住所を知らせて置き給へ」と云ふと「なアお互い必要の無い事だから」と其儘にして置かれた。」<sup>67</sup>と回想した。碌山が嫌った日本人は、碌山が嫌ったパリのフランス人と同類の人間であり、その日本人が集まる会には、決して出なかつたと言う。さらに碌山は、日本大使館すら関わりのないところと考えていた。

斎藤はまた、「巴里の生活は守衛君の性格に適はなかつたと見えて着いてから二ヶ月ばかりすると郊外に逃れ」<sup>38</sup>たと記した。1907年（明治40年）1月22日、碌山はこの引越について、井口に書簡を送っている。「神は弟を紐育の誘惑より引出し玉ひて再び巴里の大誘惑の裡に投じ玉ひ屢々戦ひ屢々敗れ（もとより肉體的墮落には至らずとも）刀折矢盡きんとして茲に五來素川先生を送り玉ひて弟を此の煩悶より救ひ出し玉はんとす。弟は巴里市内の生活に鑿き何處にか靜思の休所を求めて得ず着後二ヶ月を費し候處五來兄英遊より歸りて其閑居ピトリーの寓にある由を聞き一夜訪ふて夕食を共にし其徳を慕ひ其地を羨み遂に意を決して居を先生の近くに移し候は本年初四日に御座候。過ぎ去りし六年間殆ど全く市中の生活に黙想の閑なく夢裡夢中に徘徊して其行く所を知らざりし我は久々にて田園靜寂なる一室に入りて専ら泣かんと欲するに泣き得る境遇に歸り候を感謝す。」<sup>39</sup>。第一次アメリカ留学、碌山は渡米したもの、試練の中で絵画の修業が真に神のみ心に適う道かを悩んだ。友人の励ましで美術学校へ通い出した碌山は、渡仏を考え始める。第一次フランス留学、碌山は、経済的困窮の中よく学び、帰米直前にロダンの考える人を見て、彫刻家になることを決意した。第二次アメリカ留学は、再渡仏の為の基礎からの猛勉強の時代である。そして、第二次フランス留学、碌山は、彫刻に専心する時代を迎えようとしていた。悩み、考え、祈り、戦い、敗れ、振り返ると6年の歳月がたっていた。碌山は、この時敬虔なキリスト者五來と出会う。そして、パリの東部のヴィトリーへと移り住んだ。ニューヨーク、パリ、涙を隠し流した碌山は、今神に「田園靜寂なる一室に入りて専ら泣かんと欲するに泣き得る境遇に歸り候を感謝す」るのであった。

碌山も留学中、しばしばホームシックに陥っていた。前掲の1905年（明治38年）11月17日十重十宛碌山書簡の後半部には、講和条約とロシア革命についての碌山の考えが記されていたが、同書簡前半部には、以下のようにある。「国から御手紙を戴くと何だか変ですよ。どうも身は万里の遠きに居る様に思へないです。轟々たる紐育第五街の真中に、オートモビルの往来に織るが如き中を歩いてゐるんでも、何かコー巾下のアノ小万水の清水が靜寂として流れ去る辺りに、アノ万水の楊柳落ち尽して薄紫にはほへる林の中、又暮色爨々たる稲荷の森近き辺に、今頭うす青ふ持あげし麦畑のあたりを歩み居る様に感ずるのです。逢ふ人は温き心に平安なる一生を送りつゝある尊い人達でせう。見るものは自然てふ美はしき神の描き玉へる巻絵でせう。実に田舎はいゝですネー。帰りたいです。」<sup>40</sup>。

碌山は、家から手紙が届くと、マンハッタンの喧騒の中にありながら、故里の安曇野を歩いているように感じたと言う。そして碌山は、「温き心に平安なる一生を送る」人の住む、うるわしき「神の描き玉へる巻絵で」ある故郷へ帰りたいと思った。碌山の家は、美しい自然の中にあった。碌山は、都会にあつて心の平安を失なう時、ホームシックに陥ったが、このホームは、その美しい自然をも意味した。碌山は、欧米と日本の生活水準の落差について、深刻に考えたことはなかった。彼にとって故郷は、欧米の大都会に勝ちて余りある生活環境にあつたからである。碌山にとって都会は、誘惑の地、戦いの場であり、田園は、加護の地、安らぎの場であつた。そして、美しい故郷

を思う時、創造主を讃えるのであった。碌山は、人間も自然も神の被造物であると信じていた。しかし彼は、人間と環境を一体として観ている。碌山の自然観については、多分に東洋的なところがあったと言わざるをえない。

同書簡に記されたアメリカについての碌山の考えは、「ソー外国とか文明国とか云ひますと、余程違った、余程高尚な、余程偉い国と御思ひなさるでせうが、何に人情は少しも変わりません。全く実際です、少しも変わりません。宗教でも教育でも知識でも同じ事です。夫れはエライ人も居りますが、日本にもそれはあるです。只米国には……金持大富豪の多い丈けは一寸日本は及びますまい。……然し人情は古今東西変る事なく、善人もあり悪人もあり、」<sup>41)</sup>と云うものである。

これは多分に、人種偏見を持たなかったフェアチャイルド家での学僕体験から来ると思えるが、碌山は、アメリカ（人）と日本（人）との違いは、富豪の多少だけだと言う。他は、人情、宗教、教育、知識、全て同じだと言う。碌山は、自分の国籍を忘れなかった。民族的劣等感を持たなかった。そして、国籍の違いが心のかべを作るとも考えなかった。

碌山はこのアメリカで、生涯の友ウォルター・バックを得た。碌山の第二次フランス留学中、バックはフランスで碌山と再会した。以下は、1910年（明治43年）11月28日、バックが戸張に宛てた書簡の一部である。“Once we dined together at a cafe in the country near where he lived. There were some peasants there who were amusing themselves in a rough manner Mr. Ogihara was much interested and pleased and said “I like them, -because I, too, I am of farmerpeople”<sup>42)</sup>。

ここからは、碌山が全てのフランス人を嫌っていたのではなく、パリの浮華浅薄な人々を嫌っていたことが窺い知れよう。碌山は、ヴィトリのフランス人のおおらかで飾りのない姿を楽しんだ。そして碌山は、自分自身が“farmer”であるアイデンティティーを、常に失なわなかったのである。

## 第9章 近代日本彫刻の父

碌山の作品には物語りがある。作品であれば、そこに物語があつて当然とも云えるが、碌山の場合、絵画修業時代の習作の中にもこの物語性を感じるものが少なくない。これは単に、芸術教育によって碌山が会得した手法ではなからう。不同舎以前の碌山は、絵画を独習していた。明治時代の初等図画教育の中心は、手本の模写にあつた。井口も、『彫刻真髓』の中に、「米俣暁斉等の畫を彼は好んで模寫した」<sup>43)</sup>と記している。しかし碌山の独習は、大家の作品の模写だけに止まらなかった。碌山の日記『つくまのなべ』には、「写生」の記載が、随所に見られる。碌山は、自らの目で対象を観察して描くことをも、作画の習慣としていたのである。さらに、この頃の碌山の絵には、「模写」、「写生」と異なる目的で描かれたものがある。『つくまのなべ』十二ヶ月間會計表に描かれた毛筆画（写真1）は、その一例である。これは、碌山の「自我の目覚め」を現わす絵として知られているが、この絵の中に碌山の Narrative art の原形を見ることが出来る。碌山の描画の目的は、

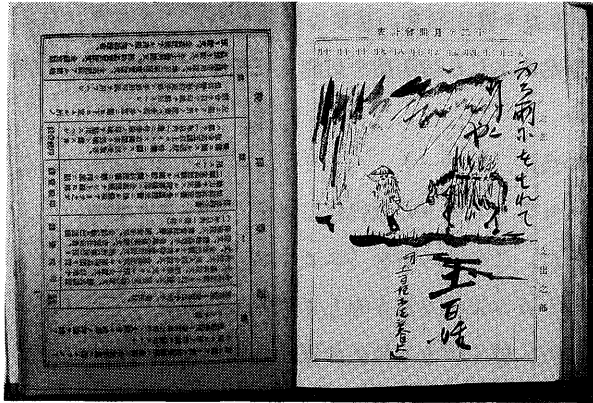


写真1 荻原守衛 十二ヶ月間会計表の毛筆画  
「碌山美術館所蔵」

絵画の上達のみでなく、自らの心情や思想の造形的表現と云う内的欲求が強くはたらいていたと云えよう。

厳しい観察の姿勢と内的表現の願望。これが後の、写実的にして自己表出的な碌山の作風を生み出す基礎となったと考えられる。

碌山の修業時代における興味深い一つの点は、その時代その時代によって、師を選んだことにある。これは選ぶ、だけではなく選ばない選びをも含んでいる。

美術学校においては、依頼心が強く、幼児性を内に持つ学生は、師の作風とその生き方を意識的に、また無意識の内に模倣し安心し、満足する傾向にある。初心者にとって、確かにまねびは学びであろう。しかし、美術学校の真の学びは、自分の芸術の発見のための自立を学ぶことにある。この発見のための厳しい芸術探求を回避する者、さらに、このことに無知な者は、晩年になっても、自分の作品の中に、自分ではなく恩師の作風を見ざるをえない。そして、この不幸は個人の不幸に止まらない。この作家から影響を受けた多くの人々の不幸でもあるからだ。

碌山は不同舎が、自分にとっての役割りを終えたと感じた時、アメリカへと旅立った。

当時のアメリカを碌山は、「國民一般に美術に附きて深き趣味を有せざるに係らず尚多教の學生を佛國等に派して研究せしめ、今日では尚幼稚であるが将来発達すべき見込はある」<sup>(4)</sup> 国と観た。今日、アメリカ人アーティストおよびアメリカ在住多国籍アーティスト（これはアメリカのアート環境の良さを意味する）をぬきにして、現代アートを語る事が不可能である事実を思うとき、碌山の予見は的中して余りがあったと言わざるをえない。ここで重要な事は、碌山の予見の理由にある。碌山の時代、アメリカは多くの学生を、アート先進国へ送り出していた。言うまでもなく、この目的は、ヨーロッパ文化のアメリカへの直接的移入にはない。近代アートの研究にあった。留学によって、近代アートの精神を培われた彼等は、帰国すると自らのアートの探求と共に、後輩の指導、学生の教育、社会の啓蒙を通して、アメリカ・アートの近代化、そして近代アートのアメリカ化に貢献したのである。更に、彼等によって創られたこの環境は、後に多くの国々からアーティスト達を渡米させ、移住させ、また亡命させる結果へとつながっていくのであった。留意すべき点は、この環境が、碌山の時代には多くの国々に存在しなかった体制と精神によって支えられていた事にある。

碌山の彫刻の中には、民主的なものが指摘されて久しい。碌山の意識、無意識に関わらず、若き日の碌山の精神的成長に、アメリカが与えた影響は少なくない。「デモクラシーの精神とアート」

を考察する上でも、「碌山とアメリカ」は、今後益々碌山研究の重要な課題となるであろう。日本人留学生碌山は、このアメリカ近代アートの情熱あふれる黎明期を垣間見ながら、日本の芸術の近代化について、どのように予見したであろうか。

碌山のアメリカ時代における興味深い一つの点は、ロバート・ヘンリーとの師弟関係にある。このヘンリーも、フランスに学び、帰国してアメリカ・アートの近代化に貢献した一人として、アメリカ・アート史に名を残した人物である。戸張は、この頃の事を「ニューヨークアート、スクールの學風別てヘンライ氏の學風は、エキस्पレッツシヨンに多く重きをして居る、荻原君は米國に来ると直にリーグに入り間もなく去つて此の人に就た、暫くすると其人の意ある所を理解し忽ち賞を得た、其畫は当時評判の作であつた。」<sup>45</sup>と記している。碌山がアメリカで最初に入学したのは、Art student's League of N. Y.であったが、そこには、不同舎を思わせる技巧中心の校風があった。そこで革新的なヘンリーへ関心を寄せた碌山は、一年後、New York School of Artへ転校したのである。ヘンリーに傾倒した碌山は、水を得た魚のように伸び伸びと制作に励んだ。戸張が記した「当時評判の作」について、パックは、“I remember one which was framed, and which hung on the walls of the school for years a beautiful thing. It was almost a pure outline; it rendered in a very complete way the movement and character of the model,”<sup>46</sup>と回想している。

しかし、第一次フランス留学から帰国した碌山は、友人達が怪訝に思う中、敬愛する恩師ヘンリーの元を去って行った。後に碌山は戸張に、「ヘンライ氏に就て學んだ後佛國に渡つて大に感じた事がある、夫れは氏の行き方は極めて善いが、自分の如き者には未だあまり早過ぎた事であつたと、で夫の習慣を打破らうと試た、而し最初の染入は容易に脱れず、始めの佛國留學は夫が爲め全々無駄となつた、」<sup>47</sup>と語ったと云う。碌山は、ヘンリーの「行き方は極めて善い」ことを知っている。しかしそれは、アートの基礎を充分会得したヘンリーの、新しいそして深い「行き方」であり、碌山は自分がまだ、ヘンリーのステージに到達していないことを、フランスで痛感したのである。基礎に弱い碌山は、多少狼狽したようでもあるが、自分はヘンリーではないこと、自分自身の「行き方」を追求すべきことを悟ったと云えよう。正しい自己認識の必要性を学んだことは、この留学が「全々無駄」ではなかったと言えまいか。帰米すると碌山は、基礎学習のために、あのアカデミックな校風の Art Student's League of N. Y. への再入学を決意したのであった。後に自分の「行き方」を発見した碌山は、次のように語った。「思邪なき小児の心これが私は藝術家の念としなければならぬ所だと思ひます。……小児の心と申しましたが、それは比喻で、何も知らない小児の心を云ふ意味ではない、アカデミックであらうが何であらうが、まづ一切を知る必要がある。一切を知つた上で其一切を殺してかゝらねばならぬ、有智から無智へ戻つてそこに累はされざる一境が開ける。大分難かしいが其所まで行かなければだめでせう。」<sup>48</sup>今日、アートを専攻する学生であれば、「一切を知る必要」性とその「上で其一切を殺」す必要性は、誰にでも理解出来る道理ではなからうか。だが、当時碌山が「工藝的労働者」と呼んだ日本の技芸中心主義の作家達には、この頭

と心の切り替えは不可能な事であり、考えもつかないことでもあった。これは碌山の思いつきではない。ロバート・ヘンリーとの師弟関係から学んだ体験である。碌山はヘンリーから教えられる以上に学んだ、そしてこの恩師をいつまでも忘れなかった<sup>49</sup>。

そして碌山は、いよいよ修業の最終ステージ、フランスへと旅立つのであった。

第二次フランス留学時代、碌山は Academie Julian 彫刻部に在籍していたが、その頃の事を本多は、「彫刻の方の先生は誰でしたか、とにかく毎週きては学生の仕事を批評してくれましたが、萩原は一向そんなものは聞いてみずどしどし勝手にやつてみました。第一萩原は佛蘭西語が丸でわからなかつたし、その批評を英語に翻譯して貰つて聞いたつて當てになんかならなかつたからです。」<sup>50</sup>と記している。また安井曾太郎も「萩原君は優秀の方でコンクールでは度々受賞<sup>(マ)</sup>仲々はゞをきかせていました。大きな聲で英語（アメリカ語）をしゃべつて<sup>(マ)</sup>仲々元氣でした。」<sup>51</sup>と記している。二度のフランス留学を経験した碌山が、フランス語を話せなかったことには訳がある。碌山は、斎藤に「時間さへあると佛蘭西語もやるんだがなア」<sup>52</sup>と話したと言うが、フランス留学は、収入の無い留学であった。碌山にとって時は真に金であり、彫刻の修業にまず時間を使いたかつたのである。またこのステージの碌山には、最早言葉によるコミュニケーションは、あまり重要な意味を持たなくなっていたと考えられる。さらに、碌山は全くの無収入であった訳けではない。安井の証言によれば、碌山は「コンクールでは度々受賞」している。受賞は賞金を意味する。碌山は少しでも多く学びたかつた。碌山のフランス滞在の必然性は、そこにロダンの作品が有り、そしてそこにロダン自身が居ることにあつた。このステージでの碌山の師はロダンと云うことになる。彼はロダンの作品からその精神を学び、自分のアートの発見を目指した。そして碌山は Julian で「どしどし勝手にやつてゐる」たのである。

今日碌山は、日本に初めてロダンの人とその精神を紹介した人物としても広く知られている。帰国した碌山は、このロダンの弟子として、脚光を浴びた。人々は、碌山の発表する作品の中に、ロダンの影響を見ようとした。帰国第一作「文覚」について碌山は、「何もロダンから来て居る訳ぢやないのに、直ぐロダンロダンと曰はれるので困る。」<sup>53</sup>と語った。たしかに似た作品もあつた。光太郎は、これについて、「ロダンの影響は随分つよく、ロダンの『ダナイデ』—守衛の『デスペア』。『皿の上のヨハネの首』—『柳敬助の首』。『ゴロッキの首』—『小児の首』。まったく同じやうなものを作つてゐるが、これはむしろ、若い眞剣な魂が自然に行ふ『キリストの模倣』といふべき神聖なアスピレイションのあらはれと見るべきで、彼のためにはこれが大きなプラスになつてゐる。」<sup>54</sup>と考えた。

では、ロダンは碌山とその作品をどのように観ていたであろうか。1912年（明治45年）、フランスへ渡つた与謝野寛は、東京朝日新聞にロダン訪問記を連載した。以下は与謝野による7月16日『ロダン翁を訪ふ（三）』掲載の一部である。「翁は「自分の弟子で若くして歿した日本人を知つて居るか」と問はれたので、僕等は生前に交際しなかつたが其遺作を屢々観た事を告げると、翁は

「彼は自分の許へ度々来たのでは無かったが、彼は善く自分の製作を觀て自分の藝術の精神を領解した。佛蘭西人よりもより善く領解した。そして、自分の藝術を模倣せずに彼自らの藝術を發見した。彼の死は彼の不幸のみで無い」と云つて日本の爲に惜まれた。」<sup>65</sup>。

碌山は、フランス語に堪能なバックを伴つて、ロダンのアトリエを訪問した事はあつたが、ロダンの門下生ではなかつた。しかしロダンは、自分の影響で彫刻を志した碌山を弟子の一人だと思つていた<sup>66</sup>。そしてこの弟子が、自分のアートの精神を深く理解し、模倣せず、自らのアートを發見したことを喜び、そしてその死を日本のアートの損失として悲しんだ。ロダンの碌山作品評については、翌7月17日の『ロダン翁を訪ふ（四）』に「彼の製作には運動<sup>ムウグマン</sup>があつた。生々して居た」<sup>67</sup>と与謝野は伝えている。

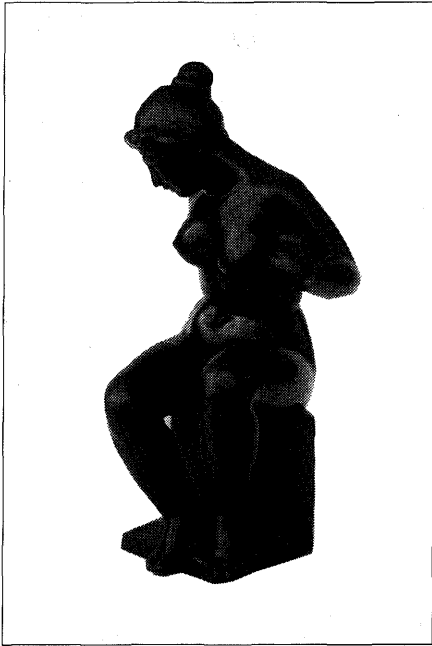


写真2 アリステード・マイヨール「レダ」  
ブロンズ「個人蔵」

ここに掲載した写真(2)は、ロダンをして、「近代彫刻のどこを見廻しても、これほど喩えようもなく美しく、この上なく純粹で、非の打ちどころのない傑作をわたしは知らない、いや、ほんとうに知らないのだ」<sup>68</sup>と言わしめたマイヨールの作品「レダ」である。周知のとうり、マイヨールはブールデルと共に、ロダンの次の時代を代表するフランスの彫刻家である。マイヨールの表現には、ロダンのそれとは全く異なるものがある。マイヨールならではの、マイヨール独自の世界がある。ロダンは、アートの精神を深く理解し、厳しく自らのアートを追求めたマイヨールとその作品に驚嘆せざるをえなかつた。

バックは、パリを離れる頃の碌山についての興味深いエピソードを書き残している。“Once, speaking of Rodin, he wrote me “I think he is the one great man of our time,” but later he came to admire Maillol very much also and wanted to buy one of his little bronzes-

a girl playing with a crab.”<sup>69</sup>。旅費にも事欠くと思われた碌山が、マイヨールの小作品の一点を買いたがつた、と云うのがそれであるが、ロダンを師として仰ぎ見ていた碌山は、この時すでに、新しい時代の彫刻家マイヨールを正しく評価出来るほどのステージに立っていたと考えてよからう。

では碌山の時代、日本の彫刻界は、如何なる状況にあつたのであろうか。石井鶴三は、日本近代彫刻の黎明期について、次のように記している。「日本の近代彫刻は明治九年に創設された工部大學の美術學校に彫刻教師として來朝した伊國人ヴィンツェンツォ・ラゲーザによつて其曙光を見るのであるが、……彫刻の本質が物形模造にあるかの如き誤りを教えてしまつたのはまことに遺憾な

ことで、工部美校の規則に「彫刻學は石膏を以て各種物形を模造する等の諸術を教ゆ」とあつた、その文字通り授業は物形模造の域を脱せぬものであつたらしい。というのは規則の文字にとらわれて云うのでなく、ラグーザの遺作を見てその仕事が物形模造に終始して居ることを明らかにし、かく云うのである。

かくして日本人はこの時はじめて造型美術としての彫刻という言葉を知り、その概念は得たが、その本質をきびしく追究することを教えられず、物形模造の域に晏如としていたので、まだ夜は明けなかつたのである。<sup>60</sup>石井は、日本の近代彫刻が「物形模造」と云う誤まった考え方から始められたことを指摘した。では、何故日本はこのラグーザを教師として選んだのであろうか。確かに、近代彫刻の本質を見極めることの出来る日本人はいなかったと考えてよいのであろうが、この選択は単なる偶然であつたのか。

日本は、長い鎖国の時代を通して、営々と独自の文化を築き上げて来た。「脱亜入欧」を呼びながらも日本は、開国によつてもたらされる西洋の精神によつて、日本の文化の独自性が浸食されることに、全く警戒心を抱かなかつたとは考え難い。「西洋彫刻の技法」のみを学ぶことが、日本の国情に即すると考えたのではあるまいか。何れにしても、日本人は技芸に長じ、日本の工芸は世界に誇る水準にあつた。そしてこの「物形模造」の考え方は、日本に適合し易かつたと云えよう。石井は、この頃の日本人が彫刻の「本質をきびしく追究することを教えられ」なかつたことを問題視したが、その後も日本人が、このことに疑問を抱かなかつたことは、更に大きな問題である。斯くして、日本独自の洋風彫刻は形成され、伝統化し、深く強く日本彫刻界に根をはって行くのであつた。碌山は、フランスで彫刻と出会い、学び、その精神を理解するに至つた。しかし、その帰国は、彼の恩師ロバート・ヘンリーのフランスからの帰米とは、あまりに異つた状況にあつたと云わざるをえない。

近代日本彫刻の父碌山を語る時、彼を並み外れた「天才」として片付けるべきではない。彼にとってアートは、与えられた人生の意味を知るための手立てであつた。他により良い手立てがあると確信出来たなら、彼はアートから身を引いたであらう。アートを自分に与えられた天職と考えはじめたとき、碌山にとってアートは、意味を持ち始める。碌山が、人生を重視すればするほど、彼にとってアートは尊いものとなつた。しかし、全てに勝つてアートのみが尊いとは考えなかつた。碌山は、終生アート至上主義者ではなかつた。

碌山は、人生の何たるかを知るために、アートを通して、人並み外れた STRUGGLE をした日本人であり、この生き方が近代日本彫刻の父碌山を誕生させたと云えよう。

#### 注

- (1) 荻原守衛「書簡」、(碌山美術館企画編集『荻原守衛の人と芸術』、信濃毎日新聞社 昭和54年、277頁所収)。以下『荻原守衛の人と芸術』として引用する。



碌山の言葉“LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY.”の考察（中編）

- (2) 荻原，前掲書，277頁。
- (3) 荻原，前掲書，275頁以下。
- (4) 荻原，前掲書，277頁。
- (5) 相馬黒光『黙移』，女性時代社，昭和11年，264頁。
- (6) 津田青楓による碌さん圭さん，『彫刻家 荻原碌山』，249頁。
- (7) 夏目漱石「二百十日」，『中央公論』第廿一年 第十號 明治39年，秋期大附録 46頁。
- (8) 夏目，前掲書，46～47頁。
- (9) 荻原守衛「蔵書の書き入れ文」，『荻原守衛の人と芸術』，297頁。
- (10) 夏目漱石「二百十日」，『中央公論』秋期大附録 16頁。
- (11) 荻原守衛「書簡」，『荻原守衛の人と芸術』，258頁。
- (12) 荻原，前掲書，262頁。
- (13) 荻原，前掲書，263頁。
- (14) 荻原，前掲書，266頁以下。
- (15) 本多功「碌山の追憶」，『彫刻家 荻原碌山』，36頁参照。
- (16) 本多，前掲書，37頁。
- (17) 五来欣造は，東京帝国大学仏法科を卒業し，読売新聞に入社，「素川」を号した。1904年（明治37年）から9年間，アメリカ，フランス，ドイツへ留学。帰国後は，同新聞の主筆となり，1919年（大正8年）に，早稲田大学教授に就任した。碌山は，第二次フランス留学時代，この敬虔なプロテスタント・キリスト者五来に，精神的に支えられていた。
- (18) 斎藤与里は，関西美術院で，浅井忠，鹿子木孟郎から絵画を学んだ。1906年（明治39年）2月，鹿子木と共にフランスへ留学し，1909年（明治42年）帰国すると，碌山を中心とした芸術運動を計画していた。
- (19) 本多功「碌山の追憶」，『彫刻家 荻原碌山』，39頁。
- (20) 碌山館は，1916年（大正5年）碌山の生家に建てられた10坪ほどの碌山作品展示館である。
- (21) 本多功「碌山の追憶」，『彫刻家 荻原碌山』，42頁。
- (22) 本多，前掲書，37頁。
- (23) 高村光太郎「荻原守衛」，『彫刻家 荻原碌山』，9頁。
- (24) 犀水生「故荻原守衛君追悼記」，『彫刻真髓』，267頁。
- (25) 白瀧幾之助より笹村草家人に宛た昭和29年9月の書簡，『彫刻家 荻原碌山』，164頁。
- (26) 本多功「碌山の追憶」，『彫刻家 荻原碌山』，39頁。
- (27) 高村光太郎「珈琲店より」，『趣味』第5巻 第4號 明治43年，19頁以下。
- (28) 高村光太郎「出さずにしまつた手紙の一束」（『スバル』，第2年 第7號 明治43年，復刻版 臨川書店内「スバル」複製刊行会 昭和40年，15～16頁所収）。以下の『スバル』からの引用は，この復刻版による。
- (29) 高村，前掲書，16頁。
- (30) 高村，前掲書，10頁。
- (31) 高村，前掲書，16頁以下。
- (32) 荻原守衛「書簡」，『荻原守衛の人と芸術』，284頁。
- (33) 荻原，前掲書，264頁。
- (34) 荻原，前掲書，265頁。
- (35) 荻原，前掲書，282頁。
- (36) 荻原，前掲書，287頁。
- (37) 斎藤与里「荻原守衛君の追懐」，『彫刻真髓』，215頁以下。
- (38) 斎藤，前掲書，214頁。
- (39) 荻原守衛より井口喜源治に宛た明治40年1月22日の書簡，『彫刻家 荻原碌山』，165頁。
- (40) 荻原守衛「書簡」，『荻原守衛の人と芸術』，276頁。

碌山の言葉“LOVE IS ART, STRUGGLE IS BEAUTY.”の考察（中編）

- 41) 荻原，前掲書，276頁以下。
- 42) ウオター・パック「荻原君に就ての記憶」、『彫刻真髓』，222頁以下。
- 43) 井口喜源治「碌山荻原守衛君」、『彫刻真髓』，190頁。
- 44) 荻原守衛「歐洲美術界の趨勢」、『彫刻真髓』，22頁。
- 45) 戸張孤雁「有の儘」、『彫刻真髓』，228頁。
- 46) ウオター・パック「荻原君に就ての記憶」、『彫刻真髓』，222頁。
- 47) 戸張孤雁「有の儘」、『彫刻真髓』，228頁。
- 48) 荻原守衛「ロダンとエジプト彫刻」、『彫刻真髓』，36頁。
- 49) 本多功「碌山の追憶」、『彫刻家 荻原碌山』，41頁参照。
- 50) 本多，前掲書，39頁。
- 51) 安井曾太郎より笹村草家人に宛た昭和29年8月の書簡、『彫刻家 荻原碌山』，168頁。
- 52) 斎藤与里「荻原守衛君の追懐」、『彫刻真髓』，215頁。
- 53) 荻原守衛「談片」、『彫刻真髓』，79頁。
- 54) 高村光太郎「荻原守衛」、『彫刻家 荻原碌山』，14頁。
- 55) 与謝野寛「ロダン翁を訪ふ（三）」（『東京朝日新聞』明治45年7月16日 第6面掲載）。
- 56) ウオター・パック「荻原君に就ての記憶」、『彫刻真髓』，223頁。
- 57) 与謝野寛「ロダン翁を訪ふ（四）」（『東京朝日新聞』明治45年7月17日 第6面掲載）。
- 58) 村松潔訳『マイヨール展カタログ』，印象社，1984，彫刻S-9。
- 59) ウオター・パック「荻原君に就ての記憶」、『彫刻真髓』，223頁。
- 60) 石井鶴三「彫刻の先學荻原碌山」、『彫刻家 荻原碌山』，51頁。